

けんぽんちゃくしよく
絹本 著色
あみださんぞんぞう
阿弥陀三尊像

鎌倉時代末期

【法量】

縦 149cm、横 69cm

この仏画は阿弥陀如来^{注1}が観音^{注2}・勢至^{注3}の二菩薩を伴って来迎^{注4}されるさまを描いたものである。三尊の衲衣^{注5}や裳^{注6}の部分に使われた細かい截金文様^{注7}が特に見事である。

阿弥陀如来の肉髻^{注8}の低いことや、指の爪が長いこと、また両手の位置などに中国宋風^{注9}がみられる。

脇侍^{注10}の観音・勢至の両菩薩の位置が、通常の三尊図のように同じ高さでないことで、脇侍の動きが感じられる。光背^{注11}の火炎は天台宗系^{注12}で、知恩院^{注13}派の画風を偲ばすものである。三尊の足元の雲の描き方などに古様がみられるが、鎌倉時代末期に我が国で描かれたものと思われる。

※琴南町誌 1986 より抜粋

絹本) 絵絹^{えきぬ}にかかれた書画。絵絹は絵を描くために糸密度が均等に織られた平織^{ひらおり}の絹織物^{きぬおりもの}。
著色) 色を付けること。
法量) 仏像^{ぶつざう}の寸法。ここでは仏像が描かれた絵の大きさ。

注1) 極楽浄土の仏。念仏を唱えたと生あるものすべてが極楽浄土に往けるという信仰が鎌倉時代に盛んになった。

注2) 人々の救いを求める声を観じて救済する菩薩。菩薩は悟りを求め修行し、将来仏になる者。

注3) 知恵の光で人々を救うとされる菩薩。

注4) 仏教用語。臨終に阿弥陀仏や菩薩が浄土より迎えに来ること。

注5) 仏教用語。人が捨てた布を洗い、縫い合わせて作られた袈裟^{けさ}。

注6) 僧侶が腰につける衣。

注7) 金箔などを細く切り、筆と糊で貼り付けて表現された文様。伝統技法。

注8) 仏の頭頂部の髪を束ねたような形の肉の盛り上がり。

注9) 鎌倉時代に出てきた、中国の宋の文化に影響を受けた仏教美術の表現。写実的で衣の皺などが複雑に描かれる。

注10) 仏像の配置で本尊の両脇に配される仏像。阿弥陀如来では左に観音菩薩、右に勢至菩薩が侍することが『観無量寿経』に説かれる。

注11) 仏像の後ろに描かれる仏像の体から放たれる光を表現したもの。後光^{ごこう}。

注12) 6世紀末、中国の智顗禪師が創始した仏教の宗派。日本には奈良時代に鑑真^{かんじん}が伝え、平安時代に最澄^{さいしやう}が比叡山延暦寺で開創した。仏教美術では経典に基づく伝統的な造形と僧の修行から生まれた独創的な造形が合わさっている。

注13) 華頂山知恩教院大谷寺。浄土宗の総本山。法然上人^{ほうねんしやうにん}が没した地に寺院が建てられたのが始まり。多数の重要な文化財を保有する。





令和3年7月作成



まんのう町教育委員会 生涯学習課 文化財室

〒766-0202 香川県仲多度郡まんのう町中通 875 番地 琴南公民館内
電話 (0877) 85-2221 FAX (0877) 85-2826

